

日常の組織的な授業改善

学校組織

互いの良さを生かし高め合う職員集団づくり

《学校の強み（○）と課題（●）》

- 若手教員が多く、教育活動全体に活気が出てきている。
- 地域に支えられ、体験活動が豊かに実践されている。
- ベテランと若手が互いに指導力を高め合う場が持てない。
- 学校教育目標等に向けてのベクトルがそろわない。



アドバイザー

☆ 指導力を高めるために、全職員でめあてを共有し、その中でよい実践例を管理職等が紹介することで、職員同士が互いに学び合う関係が築かれ、職員全体の指導力向上につながるでしょう。

☆ 学校教育目標や校内研究テーマに関わる具体的な児童の姿を全職員が共有し、教師の役割等について全体で話し合いながら実践していくことで、ベクトルをそろえることができるでしょう。

《学校の変容》

お互いの授業を見合うことは余裕がなくなかなか難しいですが、よい実践例の写真と感想を管理職がプリントし配布したことで、互いにその実践に対する意見交換が自然に行われ、ミニ研修の場が広がってきました。

研究テーマを共有したうえで、ブロックや全体で事前研を複数回行い、みんなで授業づくりや学習材づくりを行うことで、OJTが機能し、事後研も活発になってきました。先生方も自信をもって授業に取り組むようになってきました。指導力向上につながってきています。



校長先生

ベテラン、若手問わず、目指す子ども像に向けた指導について意見を交換し、互いに学び合う雰囲気が高まってきています。

各教科の本質に迫る深い学びの実現

授業づくり

子どもが自ら判断し、決定し、実行できるような学習課題や単元計画の設定とICTの活用

《学校の強み（○）と課題（●）》

- 目指す授業のよりよいイメージを学校全体で共有できている。
- 説明力の向上を図るため、視覚的に考えを共有できるICTを効果的に活用している。
- 「生徒指導の三機能」を生かした学級集団づくりについて、職員全体で理解を深めて実践できるようにしていきたい。
- 順序立てて説明することが苦手なので、算数用語を意識させ説明力の向上を図りたい。



指導主事

☆ これまでの数学的な見方・考え方を有効に働かせて、問題解決に取り組む子どもの姿が見られました。子どもの自己決定場面を大切にしているからこそ、主体性を引き出せているので、授業者としては子ども一人ひとりを観察し、子どもがどのように考え、何を見出しているのかを見取っていくことを大切にしていきたいです。

☆ 考えたことの共有だけでなく、友達の考えを実際に用いてみることで、実感をもって理解することにつながります。

☆ ICTを日常的に活用していくことで、表現の幅が広がるので、より効果的な活用ができるように教材研究を充実させていきましょう。

《学校の変容》

引き続き、子どもが選択したり、自己決定したりする場面を大切にしながら授業デザインをしていこうと思います。さらに育成を目指す資質・能力について授業者自身がしっかりと理解することと、子どもたちと共有することを大切にしていきたいです。

深い教材理解につながる教材研究をこれまで以上に大切にしていこうと思いました。授業中の何気ない子どもたちのつづやきや個々、グループでの問題解決場面の姿からどんなことを思考し、見出したのかを見取ることができるようにしていきます。

これからも、表現の幅を広げるためのICT活用を他の教科でも実践していきます。



授業者

日常の組織的な授業改善

学校組織

目標指数を設定しPDCAサイクルを回しながら取り組む学力向上策

《学校の強み（○）と課題（●）》

- 挨拶ができる素直な子どもたちである。
- 学年毎いつでも話し合いができるような職員室配置になっている。
- 働き方改革を推進しながら、教科の壁を越えた授業改善が難しい。
- ベテランの意識を変え、若手を育成する。



アドバイザー

- ☆ 全国学力・学習状況調査の分析をし、手立てを共有しましょう。
- ☆ めあてを立てて終わるだけでなく、実行を伴うPDCAサイクルにしましょう。そのために、チェックリストなどを有効に活用しましょう。
- ☆ 「付きたい力」をどう付けるのか具体策を立て全校で取り組みましょう。

《学校の変容》

全国学調の問題は、中学校では教科以外の先生方は自分事にならないという現実があります。そこで、学習状況調査から全校生向けアンケートを作成・実施しました。各分掌、各学年で、大事にしたいと考える項目について目標指数を設定し、その達成に向けて具体策を立てて取り組みました。1学期、2学期（3学期）とPDCAサイクルを回し、なぜできたのか、できなかったのかを確認しています。生徒にも知らせ、自分事として取り組んでいます。

村山教育事務所のチェックリストをもとに「授業改善チェックシート」を作成し、教職員一人ひとりがそれに沿って授業改善に取り組みました。26項目についての結果から、努力し肯定的に推移した項目と、否定的に回答した項目を把握し、さらに具体的に何をすべきか考えてもらっています。

2年生の基礎学力を上げるため、数学で1～10級の問題を作り、学び直しをしました。月曜～木曜の放課後10分間の取組みや金曜の検定を担任外も担当し個別指導も行っています。



校長先生

「話し合う力」について、朝活動の15分間を「話し合い活動（3週間×学期3回）」にしました。研究主任が提案した活動の視点や内容、改善のポイントや手順をもとに各クラスで取り組み、生徒が振り返りもしています。ディベートなどもあり力が付いたと思います。

各教科の本質に迫る深い学びの実現

授業づくり

深い教材研究をもとにした、教科の本質に迫る授業づくり

《学校の強み（○）と課題（●）》

- 生徒に付きたい力を教師が明確にして（1つに焦点を絞っている）授業に臨むため、生徒も何をすべきか理解しながら活動している。
- 問題、課題が数学的に面白く、生徒が粘り強く取り組めるものになっている。
- 生徒にとって必要感のある振り返り。生徒のための振り返りではなく、教師の評価のための振り返りになっている。
- 評価規準の明確化。特に主体的に取り組む態度。



指導主事

- ☆ 生徒が思考する場面では、課題解決の方法やそのときの形態（一人で考える、他者と考えるなど）を自己選択できるようにしていきます。
- ☆ 教師が教材研究をもとに生徒の反応を具体的に予想して手立てまで考えることで、生徒の思考に寄り添いながら授業を展開することができ、授業の目標達成につながります。

《学校の変容》

授業中における、数学が得意な生徒と苦手な生徒それぞれへの対応の仕方を意識した教材研究をすすめることで、個に応じた工夫や働きかけができるようになってきました。

考えを発表させて終わりではなく、生徒の考えをつないだり、価値付けをしたりすることで、授業の目標に迫る授業ができるようになってきました。

生徒の考えに寄り添って授業を進めることで、生徒が主体的に取り組む授業づくりにつながることを実感しました。



授業者

日常の組織的な授業改善

学校組織

全職員で取り組む学力向上

～子どもの意欲を大切に、学び合い、支え合う教室を目指して～

《学校の強み（○）と課題（●）》

- 教師一人ひとりの想像力、意欲を大切にしながら、職員間で学び合える環境づくりが行われている。
- 日常の授業や授業研究会での助言、全国学調の分析等、全職員でアクションプランを活用しながらPDCAサイクルを確立している。
- 児童にとって学ぶ必要感があり、ねらいを達成するための課題設定について吟味していく必要がある。
- 学びを深めるための工夫や教師の適切な関わりについて改善していく必要がある。



アドバイザー

- ☆ 付けたい資質・能力を明確にして、児童の実態と合っているか、まとめと正対しているか、子どもの迷いや疑問から課題が設定されているか等を意識して課題を設定していきましょう。
- ☆ 児童生徒が自ら情報を集めたり、関連付けたり、吟味・検討したりできるような手立てを講じていきましょう。また、一人ひとりの実態を確かめながら支援や指導を行っていきましょう。

《学校の変容》

協働的に学びながら、個の力をどう高めるかを大切に授業づくりを意識して取り組んでいます。

付けたい資質・能力を明確にし、より主体的に取り組むことができる学習活動となるための課題づくりを大切に指導に当たっています。



校長先生

習得・探究・活用のバランスと、学びをどのように見取るか、単元をデザインする力を高めてきました。

各教科の本質に迫る深い学びの実現

授業づくり

若手教員の授業力向上を目指して

《学校の強み（○）と課題（●）》

- 若手とベテラン相互のよさを生かした学び合いを推進し、全体・ブロック・学年の機能を生かしながら活性化を図っている。
- 資質・能力系統表を作成し、日常の授業改善に取り組んでいる。
- 働かせたい見方・考え方をより明確にしていく必要がある。
- ねらいに迫る学び合いに改善していく。



指導主事

- ☆ 見方・考え方を働かせている姿を児童の姿で具体的に捉え、児童が自覚できるように問い返して引き出したり、見方・考え方に関わる児童の発言を板書したりしていきましょう。
- ☆ 何を話し合う時間なのか明確にして取り組ませましょう。児童が、自分の考えを再構築したりまとめたりする時間をもちましょう。
- ☆ 本時は単元の中でどのような位置付けになるのか、単元を通した授業づくりを大事にしましょう。

《学校の変容》

若手教員の「授業力を高めたい」という意識が強くなりました。若手が授業について先輩や同僚に相談する場面が多く見られます。ベテランも刺激を受けています。

このたびの指導と本校の校内研究やアクションプランが関連し合っていることに気づき、これまで以上に日常の授業改善が深まりました。チーム MOGAMI 授業研究会の授業者にも挑戦しました！

資料にアンダーラインを引くなどして、子どもが学びのポイント（見方・考え方）を意識し、思考するようになりました。

付けたい資質・能力を示し、それに照らして評価することを通して、子どもの成長と課題を把握することができました。授業では、説明はできても書くことが苦手な子どもたちに、じっくりと個別最適な学びや協働的な学びの場面を工夫して設定しています。



授業者

日常の組織的な授業改善

学校組織

日常的な組織対応の風土づくりを大切にした
持続可能なOJTの推進

《学校の強み（○）と課題（●）》

- 若手教員が多く、日々の授業づくり等について学年を越えて意見を交流し合っている。
- 学校行事等を担当教員だけに任せずに、対話と分担により協働で作り上げる雰囲気がある。
- 一層のOJT機能の充実を図り、教師一人ひとりの授業力の向上とともに、それぞれの強みを生かした学校体制をつくるための機会を設けていきたい。



アドバイザー

☆ 日常的な課題に教職員が協働で取り組まれていることがOJTの充実そのものだと感じます。OJT推進のために新たなことを行うということではなく、今現在、学校で取り組まれている効果的なことを全職員で再度、価値付けしていくことも大切ではないでしょうか。

《学校の変容》

本校の強みを再認識することができました。
教職員一人ひとりの持ち味を大事にしながら、目の前の子ども達のよりよい成長に向けて、協働的に日々の教育活動を行う雰囲気をこれまで以上に大切にすることができるようになりました。

これまで以上に風通しのよい職員室となり、働き方改革とOJT推進の両立が図られています。



校長先生

各教科の本質に迫る深い学びの実現

授業づくり

見方・考え方を働かせた学習活動により、
育成を目指す資質・能力を身に付ける授業づくり

《学校の強み（○）と課題（●）》

- これまでの校内研究等の積み上げにより、自ら課題を設定するとともに、既習の学習内容を生かしながら課題を解決したり、交流によって考えを深めたりすることができる子どもが増えてきている。
- 全ての子どもが「分かる・できる」授業を目指して、UDの視点を生かした学習環境デザインを授業づくりの柱の1つにしている。
- 具体的な子どもの姿をイメージし、それを達成するための手立てや評価について研究していく必要がある。



指導主事

☆ 全ての子どもが楽しく学び合い「わかる・できる・探究する」ことを目指すことが授業UDです。

全ての子ども達の深い学びにつなげるために、教科特有の見方・考え方を子ども自身が働かせるような授業づくりをさらに意識していきましょう。見方・考え方は手段であって、目的ではありません。育成を目指す資質・能力を受けて題材や単元、本時で働かせたい見方・考え方を指導案に明記にしてみてもはどうでしょうか。

働かせたい見方・考え方を明確にしたことで授業での子ども達の姿をこれまで以上にイメージすることができるようになりました。

授業研でも働かせたい見方・考え方を子ども達が働かせていたのかについて話し合い、授業改善につながっています。



授業者

日常の組織的な授業改善

学校組織

目指す子ども像の具現化を図るための組織的な取組みの充実

《学校の強み（○）と課題（●）》

- 「主体的・対話的で深い学び」を意識し、積極的な授業改善が進められている。
- 教員の構成について、ベテラン教員と若手教員が多く中堅教員が少ないが、校内OJTを充実させながら教員の担任力向上を図っている。
- 学校として育成したい資質・能力を踏まえ、学習基盤として必要な資質・能力を明確にする必要がある。



アドバイザー

- ☆ 学校教育目標を受けた「目指す子ども像」に対する具体的なイメージを全職員で共有しましょう。その上で、目指す子ども像を具現化するために必要な資質・能力は何かを明確にし、絞り込みましょう。
- ☆ アクションプランの成果と課題について、具体的な根拠をもとにして検証するとともに、組織全体で持続可能な取組みになっているか確認することが大切です。

《学校の変容》

「学校訪問シート」や「アクションプラン」をもとにして、目指す子ども像を全職員で具体的にイメージしました。そこから育成しなければならない資質・能力を絞り込んだことで、先生方がその力を常に意識しながら指導や支援にあたることができました。



校長先生

学力向上に向けた学年の取組みについて、系統性を重視しながら見直しを図りました。日常的に職員間の情報交換も活発になり、組織全体で取り組む意識がさらに高まりました。

各教科の本質に迫る深い学びの実現

授業づくり

深い教材研究と児童生徒理解をもとにした授業づくり

《学校の強み（○）と課題（●）》

- 児童生徒が興味・関心をもって取り組むことのできるような課題設定を工夫している。
- 学習における一人ひとりの実態を丁寧にとらえ、個のつまずきに応じた手立てを考えている。
- 学習過程において、児童生徒の発言や記述等からよさを見取ったり、価値付けたりする部分に課題が見られる。



指導主事

- ☆ 児童生徒の実態をもとに、学習指導要領解説や教科書を参考にしながら「単元で付けたい力」は何かを具体的にイメージすることが大切です。
- ☆ 児童生徒にどんな振り返りを書かせたいか、具体的に考えてみましょう。その上で「まとめ」、「活動」、「めあて」、「目標」など逆算の思考で確認し、付けたい力を付けるための授業になっているか確認しましょう。
- ☆ 教師一人ではなく、組織で教材研究に取り組みましょう。その際、他教科とのつながりや他学年への系統性も確認することが大切です。

《学校の変容》

教科書の場面設定や流れなどを分析したり、学習指導要領解説で確認したりすることで、より「単元で付けたい力」を明確に意識することができました。また、その力が次の学年にどのようにつながっていくのか確認することで、大事にしたいポイントが見えてきました。

子どもの思考に添って振り返りを書いてみましたが、とても難しかったです。そのような振り返りが生まれてくるような学習過程を組んだり、子どもの考えのよさを見取ったりするためにも、教材研究を大事にしていこうと思います。



授業者